

吉備国の語源「黄蕨」調査報告書-2 黄蕨国の解析『突蕨国からの渡来者集団が建国』

日本先史古代研究会会員 丸谷憲二

1 はじめに

『創刊号』に『吉備国の語源「黄蕨」調査報告』として、江戸時代から戦前迄の文献調査結果を報告し、まとめとして「キハラと
のルビに注目しました。蕨の読みはケツ・カツでありハラとは読めません。岡山県の江戸時代から戦前までの研究者は『先代
旧事本紀大成経七十二巻本』の記録を「8本の黄色いワラビ」と訓読みし「黄色いワラビ」を植物生態学と考へ「ワラビの突然
変異」として考察しています。私は、この基本認識は間違っていると考えました。」と報告しました。

平成22年3月に岡山市瀬戸公民館(瀬戸町の文化財を語る会)、6月に備前市伊里公民館、7月に赤磐市熊山町中央公民館(熊山遺跡群調査研究会)にて、『吉備国の語源 黄蕨と羈縻(きび)政策 熊山遺跡出土品の考察』との演題で2時間講演を行いました。植物生態学としての「ワラビの突然変異」を間違いと考へ、地名学で考察し突蕨国にたどり着くまでの過程を報告します。

2 平成20年8月24日 吉備学会の発表後によせられた情報

2-1 備中古名『黄蕨』(キハラ)とのルビの解説(平成20年8月27日大井透氏 教示)

黄蕨の件ですが、キハラと読むのは漢字が本来持つ音韻とは直接の関係はないのではないかと思います。ローマ字表記をすれば分かりますが、黄蕨はKIWHARABIとするとKIHARAというように音が短縮して転訛(スル語の本来の音がなまって変化すること。また、その語や音。)した。また、KIBIとなり吉備津彦と戦ったウラは百済から来たといわれているので古代朝鮮語とも関わり合いがあるのかも知れません。

木村神社は本来、城村神社というように、キハラは本来、城原城の跡地の野原。黄蕨伝説のある大和朝廷によって滅ぼされた一族の城跡の原ともとれます。それは、以下の例からあり得ると考えます。また、日下はヒノモトとしか読めませんがクサカと読みます。元来はひのもの、くさか日下の草香というように掛詞が懸かり言葉の読み転訛したというのを聞いたことがあります。フィギュアスケートの村主章枝さんの村主は、スグリと同様に村主をしている勝秦氏の後裔です。また、東海林(地名)の庄司をしていてショウジと読むような例ではないかと私は考えています。

2-2 『ポリネシア語で解く日本の地名・日本の古典・日本語の語源』(井上政行 説)

古く縄文時代、日本列島に原ポリネシア語を話す民族が南方から渡来して住み着き、原ポリネシア語で地名を付けていたと思われる。その地名は昔も今も殆ど変わらない発音で生きて使われている。しかも、古事記、日本書紀などの古典や、日本語の語彙の中にも多くの原ポリネシア語源の言葉を見出すことができる。これまで意味が判らなかつた地名や、古事記・日本書紀の中の意味の判らなかつた神名・人名や、万葉集の枕詞や、いろいろの言葉の意味を発音が全く同じポリネシア語によって明らかにしようとする。これによって、これまで闇の中に包まれていた日本、日本人、日本列島、そして古代史の真の姿が見えてくる。岡山県の地名・吉備国の地名には、記紀所出のものが多く残る。

「キ・ピ」、KI-PI(ki=full,very;pi=eye)、

「眼(のような窪地・盆地)が・たくさんある(地域)」もしくは「大きな・眼(のような盆地=津山盆地)がある(地域)」または

「キピ」、KIPI((Hawaii)revelion,revolt,to dig with a sharp tool)、

「反乱を起こした(地域)」もしくは「先細の掘り棒で掘ったような(細かい起伏がある。地域)」の転訛と解します。

3 日本語学による解析『黄蕨』の読みは・漢字音(呉音・漢音・唐音)

漢字を中国語の発音で取り入れた読み方。「行」の字を例にすると、ギョウ(修行・行者)が呉音、コウが漢音(行動・実行)、アン(行脚・行燈)が唐音である。

『万葉集』や『古事記』に見られる万葉仮名は「呉音」で読み、『日本書紀』に見られる万葉仮名は「漢音」で読まなければならないなど、同じ万葉仮名でも文献によって読み方は違っている。

『先代旧事本紀大成経七十二巻本』の研究は、^{くどうたかゆき}宮東孝行氏(宮東齋臣)^{みやとうなりおみ}の研究後継者である後藤隆氏(『先代旧事本紀大成経』刊行普及会代表)の調査が最も正確であると考えられる。後藤隆氏の調査では「推古 30 年(622)先代旧事本紀大成経成立。編纂者 聖徳太子・秦河勝」である。『黄蕨』は 622 年に記録された古代地名である。呉音で読むか、漢音で読むかがポイントである。漢音では「コウケツ」、呉音では「オウカチ」となる。

呉音	六朝時代・江南＝古代日本・仏教語関係
漢音	唐時代、長安を範とする北方音＝奈良時代以後・儒教を含む一般
唐音	宋音、南方・室町期以後・臨済禅関係

4 日本語表記の成立「上古の世にまだ文字あらず」

漢字が伝来する以前に日本語は固有の文字は持っていなかった。『古語拾遺』(^{いんべのひろなり}齋部広成 大同 2 年:807 成立)は「蓋聞、上古之世未有文字」と書き出している。文字は政治の道具として重要だった。日本人が初めて接触した文字は中国の漢字であった。文字が無かった時代でも人々は語り部が口伝えで古くからの伝承を伝えていた。日本語が最初にめぐりあった文字は漢字であった。

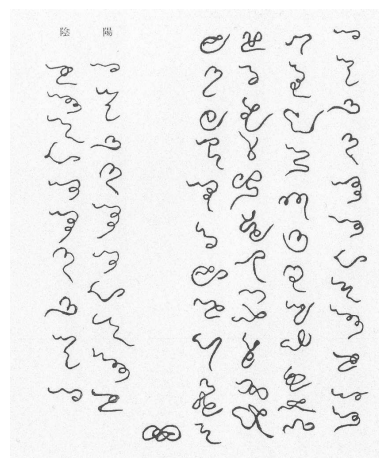
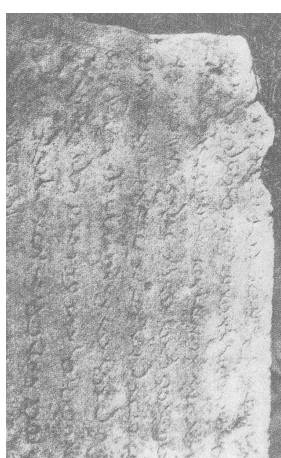
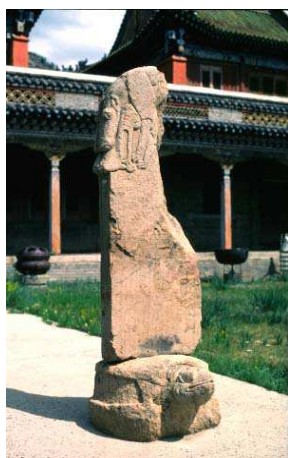
世界の文字は、^{ひょうい}表意・^{ひょうおん}表音(一つ一つが音声上の単位に相当する文字)・^{ひょうご}表語文字(一つ一つの文字で言語の一つ一つの語や形態素を表す文字体系)に区分され漢字は代表的な表語文字であり、黄蕨は表意文字(一つ一つの文字が意味を表している文字体系)である。

「^{じんたい}神代文字」で記録された太古文献(古史古伝:竹内文書=100 種以上の文字有り・^{くかみ}九鬼文書=春日文字・^{かすが}宮下文書=アソヤマ文字・^{つがるそとさんぐんしつぼけ}東日流外三郡誌=津保化砂書文字 等)は現在の学説では偽書とされている。

唐松神社(^{からまつ}韓服宮:秋田県大仙市協和境字下台)の文治4年(1188)に書写された『天津祝詞』には、古代物部文字(アヒルクサ文字)で記された^{しょうもん}ヒフミ誦文が含まれている。

西モンゴル・ツェツェルレグ市の^{きふ}県立博物館の庭に亀趺の上に立つ^{ボガト}ブグト碑文(建立 570～580 年頃)が有る。ブグト碑文には古代のソクド文字が彫られている。ソクド文字には数種類の文字の形態がある。古代物部文字にブグト碑文のソクド文字のみが類似している。物部一族と古代モンゴルとの結びつきが暗示される。^{からまつ}唐松神社は物部氏の末裔が代々宮司職を継承する神社である。

進藤孝一氏は、物部氏の出自を「天降り伝承を持ち、緑なす森林を崇拝する氏族、朝鮮半島以北の緑の少ない地域の出であろう。北方系の蒙古族が朝鮮半島を経由して天降り・神宝などの伝承を取り込み、日本列島に渡来した説もある」としている。岡山県にも物部氏の末裔が代々宮司職を継承する^{ひぜんのかにあかいわごほり}備前国赤磐郡一宮・^{ふつみたま}布都之魂神社(岡山県赤磐市石上字風呂谷)がある。



ボガト(ブグト)碑文のソクド文字

唐松神社の古代物部文字 (アヒルクサ文字)

5 地名学による解析

地名学とは「人が動けば地名が残る」という発想である。

5-1 国内 埼玉県蕨市

「わらび」という地名がいつごろから言われているか不明である。文献上の初見は、観応3年(1352)の「渋川直頼譲状写」(上家文書)に「武蔵蕨郷上下」と記録されている。蕨市の地名の由来・3説有。

① 源義経が立ちのぼる煙を見て「蕨火村」と名付けた。

在原業平が蕨をたいてもてなしをうけたところから「蕨火」と命名した。「蕨火」説。

② 憎慈鎮の「武蔵野の草葉にまさる わらびをげにむらさきの塵かとぞみる」の歌。

近隣の戸田市や川口市に青木、笹目、美女木など植物名の地名有り。「蕨」説。

③ 和楽備神社

社伝によれば、室町時代に蕨を所領とした足利将軍家の一族、渋川氏が蕨城を築き、その守り神として八幡大神を奉斎した。

5-2 大陸 突厥国

仮説 黄蕨国は突厥国からの渡来者(トルコ系民族の遠祖)が建国した。

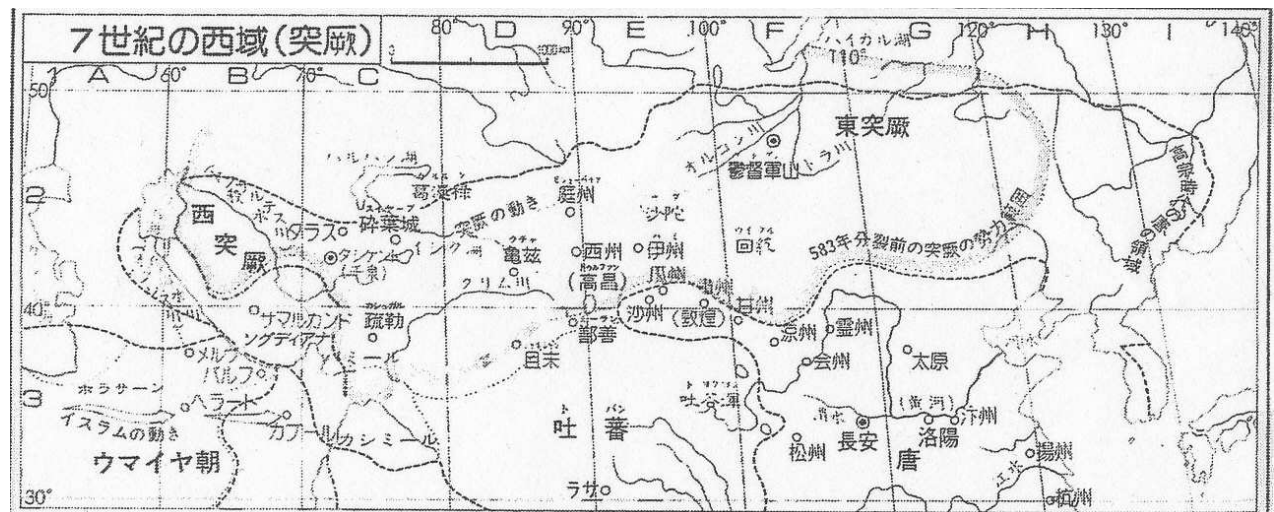
5.2.1 突厥国とソグド文字

テュルクを中国人は突厥国と表記した。突厥帝国の成立は 552 年である。その中心になった氏族は阿史那である。阿史那氏は遊牧民には珍しい鍛鉄技術で勢力を伸ばした。テュルクとは兜の形をした金山に由来している。突厥は 583 年にモンゴル高原を本拠とする東(北)突厥と、中央アジアを支配する西突厥に分裂した。西突厥は天山山脈北方地域、東西トルキスタン

を勢力下におき、中央アジアが「トルコ化」していく道を開いた。分裂後は仇敵となり数十年交戦した。

突厥国内にはソグド人が多く、突厥と中国・ササン朝ペルシャ・東ローマ帝国を仲介する使節の役目を果たしていた。突厥初期の公用語・文字はソグド語・文字であった。

法隆寺の香木に焼き記された文字が 1986 年東野治之の調査がきっかけとなり、吉田豊氏(神戸市立外国語大学教授)によってソグド語と特定された。法隆寺は 607 年建立である。香木がいつのものかは特定されていないがさほど時代は違わないだろう。



7 世紀の突厥国の位置(西突厥国と東突厥国)

6 DNA による解析「日本民族の源流は何処か」

松本秀雄氏は、『日本民族の源流を考えると、日本人の Gm 遺伝子パターンの中でも、北方型の標識遺伝子である黄色の a b s t 遺伝子の流れに基づいて、「日本民族の基層をなす人々は北方型蒙古系民族に属し、その源流はバイカル湖畔にある。」と結論づけている。南方型蒙古系民族を特長づける赤の a f b b 遺伝子の頻度は 10.6% であって、中国東北部の漢民族とも全く異質のものである。現在の日本人には依然として Gm a b s t 遺伝子が 26% の高さで保持されており、北方型蒙古系民族の

特徴が明確に保持されている。

日本人は、Gm 遺伝子の分布から見る限り、また ABO 遺伝子の分布からみても、アイヌと宮古の集団を除いて全土において等質である。シベリアのバイカル湖畔のブリアート人は日本人と酷似している。日本民族は、北方型蒙古系民族に属するもので、その起源はシベリアのバイカル湖畔にある。』と報告している。ロシアバイカル湖の近くに東突厥国があった。人口の増加とともに、流れの豊かなアムール河を下って日本列島の地に到達することは、さほど困難なことではなかったのではないか。

「モンゴル語系の民族として、ブリアード人とモンゴル人がいる。HLA(ヒト白血球抗原)の研究によれば、日本人には主要な4パターンがあり、そのうちモンゴル人に多いパターンである、B52-DR2 は日本人全体で最も多く、北九州、山陽から近畿、山形、福島で12~13%以上を占めている。これは、モンゴル高原から入ってきたパターンではないか。」との徳永、十字説がある。磯貝正雄氏は、「中国地方、近畿地方の古墳集団は、縄文系対渡来系の仮想混血集団の混血率は2対8、及び1対9に最も近い。渡来人が日本人形成に深く関与したのは確かなことである。」と報告している。

7 突厥国と雅楽伝来史・「秦一族」

最近、雅楽が静かなブームである。とりわけ雅楽人気を高めているのが東儀秀樹氏である。宮内庁の式部職楽部で雅楽を学び、宮中儀式で雅楽の演奏を手掛ける。宮内庁を退職した後はフリーの雅楽師として多彩な音楽を披露している。東儀秀樹氏のルーツ、雅楽界の名家「東儀氏」の始祖が「秦河勝」である。秦氏は謎の一族とされている。

6~7世紀、聖徳太子の側近である。秦河勝が建立した寺社は数多く、京都太秦・広隆寺が知られている。秦河勝には多くの子供がおり、4男と6男が秦東儀氏を名乗り、やがて東儀氏と称した。彼らは雅楽と舞蹈に秀で、聖徳太子が建立した四天王寺で楽人として大成し今日の東儀家へとつながっている。東儀氏は秦東儀氏であり秦氏であった。秦氏は古代日本における殖産豪族であり平安京を誘地・建設した。

『蘭陵王が率いた部族は、鮮卑・匈奴・柔然・勅勒などの諸民族による胡人部隊であった』。蘭陵王の曲には沙陀調音取が付いている。沙陀は沙陀族のことで、敦煌の北、ハミのあたりに居住する西突厥の一部が沙陀突厥と呼ばれていた。鮮卑・匈奴・柔然・勅勒は、モンゴルと先祖を同じくするツングース系統であり蘭陵王の一族は鮮卑族である。

8 阿波命神社と高祖神社

新羅・百濟・高麗の名を冠した渡来氏族の神社研究は報告されてきている。はるか古代に渡来した人々の痕跡の研究である。しかし、突厥国からの渡来者を祭る神社の研究は皆無である。『突厥伝(周書・隋書・北史・旧唐書・新唐書)』より人名を抜粋して紹介したい。岡山県人が思い込んでいる黍国(キビ)と粟国(アワ)、阿波国の阿波のルーツは徳島県では無い。突厥国の阿波氏が、伊豆諸島の神津島の阿波命神社から徳島県へ移動している。瀬戸内市牛窓町の高祖一族は突厥国の高祖氏である。突厥国からの渡来者は神社の名前・祭神となっている。

『突厥伝(周書・隋書・北史・旧唐書・新唐書)』

沙鉢略(可汗)は、阿波(可汗)があまりにも勇猛果敢なのでそねみ嫌っていたが、この時先に帰ったので、阿波(可汗)の属領を襲撃してうち破り、その母を殺した。阿波(可汗)は帰るところがなくなり、西方の達頭(タルドウ)可汗のところへ行った。	阿波氏 阿波命神社 東京都神津島村長浜 1-2 祭神 阿波咩命 伊豆諸島・神津島の神社 延期式神明帳 伊豆国 92 社 阿波咩命は三島大社の本后にして神異を顕し島を造りて其の造れる島に鎮座し給う事は續日本後紀に承和七年(840)九月乙未伊豆國言ス賀茂ノ郡有造作島本名上津島。此島に坐ス阿波神ハ是三島大社本后也。又坐ス物忌奈ノ命ハ即前社ノ御子神也。
--	---

<p>唐は 618 年の隋の滅亡と同時に、山西省の武将だった李淵が建てた国である。李淵は即位して高祖と称した。</p>	<p>高祖氏 ^{たかす} 高祖神社</p> <p>福岡県前原市大字高祖 1578</p> <p>祭神 彦火々出見尊・玉依姫命・息長足比女命</p> <p>糸島半島とその後背地には、物部連の祖である饒速日命 ^{にぎはやひのみこと} (彦火々出見尊)と、その一族を祭る神社が集まっている。</p> <p>古代から怡土郡の惣社(中世怡土庄一の宮)と崇敬され、三代実録に元慶元年(877)九月二十五日癸亥「正六位高儀比賣神に従五位下を授く」と有る。</p> <p>高儀比賣神とは高祖神社の祭神である。</p> <p>宮司職上原氏の系譜には怡土城鎮守高祖宮とある。</p> <p>怡土城は前原市と福岡市との境にある高祖山(標高 416m)の西斜面一帯に築かれた古代山城である。『続日本紀』によると、天平勝宝8年(756)6月から神護景雲2年(768)2月まで約 12 年をかけて完成した。築城担当は吉備真備、途中から佐伯今毛人に交代し完成。</p>
<p>アシナ族には狼祖 ^{おおかみそ} 説話がある。</p> <p>545 年頃の部族長はブミン(土門 ^{ともん})であった。</p> <p>土門の子が加羅、加羅の子が、俣斤(在位 553 ~572)である。</p> <p>彼は容貌が大変変わっており、顔の広さは一尺あまり、その色は赤色もはなばなく、目はガラスのよう、性質は剛暴で征伐をこととした。突蕨民族の場合、白人種のような突然変異の人間が時々生まれるようである。突蕨民族の行動範囲の広さを物語るものである。</p>	<p>土門氏 土御門神道本庁</p> <p>鎮座地 福井県遠敷郡名田庄村納田終</p> <p>天文方ができる以前の暦は、朝廷の土御門家・幸徳井家で作られていた。土御門家は安倍清明以来続く陰陽道の家柄で、代々、幸徳井家とともに暦の制作にたずさわっていた。</p> <p>土門氏 土門子神社</p> <p>旧満州国東満総省間島省琿春県春化村土門子嶺</p> <p>祭神 天照大神</p> <p>創立 昭和 14 年4月 5 日</p>

9 考察

① 日本語学による考察

『黄蕨』は、古代地名であり、漢音で「コウケツ」と読まなければいけない。

『黄』は「黄帝」を意味している。神農の後裔(神農の八代目の末裔)で姓を公孫名を軒轅という。古代中国の伝説的皇帝である。五帝の一人で天下を統一し度量衡を律し八卦説、暦、天文、舟、竈などを作り、音楽を定め、宮廷制度を確立した。

② 地名学による考察

黄蕨国、蕨は突蕨国からの渡来者を意味している。

③ 「于時行宮庭一夜生八蕨、其長一条二尺、其太二尺五寸、其色濃黄、国有人神、云黄 光命、此草異草也」の「八」と「黄」は、黄帝が神農(古代中国の皇帝)の八代目の子孫 であり偉大な皇帝であることを記録に残すための比喻だと考える。

「異草」と有り黄蕨国成立以前の先住民族の記録である。「是齋元_神不_同_異国諸神無_威、其法元也、先産_十有三柱神等_、先生_天水建大秋津彦神_、次生_地水建小秋津媛神_、此神坐_黄蕨前国一宮_矣、潤_世界_神、有_威徳_神、此二神者水方神也」

④ 『日本書紀』継体天皇 7 年(513)条に百濟から五経博士が 貢 ^{たてまつ} られたとの記録がある。儒教の聖典である五経中に『易経』が含まれている。

『先代旧事本紀大成経七十二卷本』は 622 年成立であり、「陰陽本紀」とあり陰陽博士によって記録された文書と考える。陰陽道の根拠が「陰陽五行説」である。威徳神とあるように方位を基礎として記録されている。解読するためには陰陽道

の基礎知識が必要である。

- ⑤ 陰陽五行説いんようごぎょうせつによる考察
陰陽五行説では一般の東西南北の4方が、中央を含め5方と考える。四方八方では無く五方八方である。各方位に五行を当てはめる。東＝木・南＝火・西＝金・北＝水・中央＝土である。この概念は季節にも当てはまる。それが五色である。方位には色がある。東＝春青・南＝夏赤・西＝秋白・北＝冬黒(紫)・中央＝土用・黄である。
- ⑥ 八の考察
八の呪術。柳田民俗学では古代日本の聖数を七とし、七から八に変化したとしている。
八幡宮・八重垣・八重事代主神・八所御霊(怨霊)・八王子等の八の起源は、「黄帝こうてい」が神農しんのうの後裔(神農の八代目の末裔)より発展したと考える。八は吉田神道の思想を表す聖数である。
- ⑦ 黄蕨前国一宮の祭神「天 水建大秋津彦神、地水建小秋津媛神」は、大日本国一宮・備中国吉備郡・吉備津神社、吉備津彦神社には祭られていない。
- ⑧ 黄蕨津神社・黄蕨津彦神社の祭神、「黄蕨津彦神」は突蕨国とっけつからの渡来者である。

10 まとめ

- ① 黄蕨国は、突蕨国とっけつからの渡来者(皇帝)が建国した国である。
- ② 黄蕨津彦命は、東突蕨国からの渡来者であると推定する。
東突蕨国からの渡来者だから黄蕨津神社、黄蕨津彦神社の祭神となっている。
- ③ 『騎馬民族征服王朝説(江上波夫)の後継者』・岡山大学東洋史専攻の小林恵子やすこは、古代日本を東アジア史の中に位置づけ聖徳太子の出身地を西突蕨国としている。
「黄蕨津彦命は、東突蕨国からの渡来者」との調査結果は小林恵子説の一部を補説するものである。
- ④ 古事記(712年)・日本書紀(720年)が、吉備国と誤記し黄蕨国の正史を変えてしまった。国家権力による意図された誤記かもしれない。
- ⑤ 黄蕨国うらの温羅伝説の正史は、西突蕨国と東突蕨国からの渡来者間の争いかもしれない。

11 追記

現在、『先代旧事本紀大成経』・『物部文書』は偽書とされている。古代史への初挑戦が偽書の検証報告となった。『別冊歴史読本 徹底検証 古史古伝と偽書の謎』の類似本が多く出版されている。各著者の結論は「古事記・日本書紀の内容と異なっているから偽書と認定する」である。逆に「古事記・日本書紀を、何を根拠に正しいと判断するのか」と質問したら返答できる研究者は居ないと思われる。神様の名前の由来・根拠を説明できない研究者が偽書説を発表している。

天和1年(1681)の徳川幕府による『大成経七十二巻本』(潮音本)の禁書・回収処分は幕府に届け出をせずに出版したことを理由に処罰していると後藤隆は報告している。

12 参考文献

- ①『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』平成11年小笠原春夫校注 神道体系編纂会
②『謎の根本聖典・先代旧事本紀大成経』後藤隆 2004年 徳間書店
③『ポリネシア語で解く日本の地名・日本の古典・日本語の語源』<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>
④『歴史文化ライブラリー151 日本語の誕生 古代の文字と表記』沖森卓也 2003 吉川弘文館
⑤『歴博フォーラム 古代日本 文字の来た道 古代中国・朝鮮から列島へ』2005 大修館書店
⑥『朝倉漢字講座1 漢字と日本語』前田富祺 野村雅昭 2005 朝倉書店
⑦『歴史文化ライブラリー 日本語の誕生 古代の文字と表記』沖森卓也 2003 吉川弘文館
⑧『世界の歴史⑩ 草原とオアシス』山田信夫 昭和60 講談社
⑨『シルクロードを知る事典』長澤和俊編 平成14年 東京堂出版

- ⑩『アジアの歴史と文化』竺沙雅章 1999 同朋舎
- ⑪『東洋文庫 223 騎馬民族史 2 正史北狄伝』山口信夫他 訳注 昭和 47 年 平凡社
- ⑫『東アジア 民族の興亡』大林太良 生田滋 1997 日本経済新聞社
- ⑬『聖徳太子の正体』小林恵子^{やすこ} 1990 文芸春秋
- ⑭『日本人の起源』山科ももじろう 2003 文芸社
- ⑮『データが語る日本の歴史』歴史教育者協議会 1997 ほるぷ出版
- ⑯『日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く』松本秀男 1992 年 日本放送出版協会
- ⑰『日本書紀 塗り替えられた古代史の謎』関裕二 2005 実業之日本社
- ⑱『岡山県史 第 17 巻 年表』平成 3 年 岡山県
- ⑲『岡山市史 古代編』昭和 37 年 岡山市役所
- ⑳『天文暦法と陰陽五行説』飯島忠夫 昭和 14 年 恒星社
- 21『幸せを招く陰陽術』石田千尋 2008 マガジンハウス
- 22『日本古代神祇事典』吉田和典 平成 12 年 中日出版社
- 23『新羅の神々と古代日本-新羅神社の語る世界-』出羽弘明 2004 同成社
- 24『海外神社一覧』 <http://homepage1.nifty.com/kitabatake/jinja8.html>
- 25『吉備津神社文書』藤井駿 昭和 30 年 吉備津神社社務所
- 26『吉備津彦神社史料 文書篇』昭和 11 年 吉備津彦神社社務所
- 27『吉備津彦神社要覧』昭和 7 年 吉備津彦神社社務所
- 28『吉備津神社記 全』明治 44 年 藤井奎之助 吉備津神社社務所
- 29『秋田「物部文書」伝承』進藤孝一 1984 無明舎出版
- 30『秋田・唐松神社にて』<http://www.nippon-bunmei.jp/tsurezure-10.htm>
- 31『世界の文字の図典』世界の文字研究会編 平成 5 年 吉川弘文館
- 32『別冊歴史読本 徹底検証 古史古伝と偽書の謎』2004 新人物往来社
- 33『陰陽道の本』1993 学習研究社
- 34『雅楽と歴史 II』<http://s-koubou.hp.infoseek.co.jp/rekishi2.htm>
- 35『三神たけるのお伽秦氏「雅楽」』<http://www.kitombo.com/mikami/0310.html>

13 参考講演

大阪国際宗教同志会 基調講演

平成 9 年 6 月 11 日

『民俗のこころと鎮めの文化・聖徳太子の正体』抜粋

大阪大学 人間科学研究科 教授 大村英昭

金光教泉尾教会神徳館 国際会議場

そういうふうと考えていきますと、いずれにしろ、日本仏教は、インド古典仏教からは相当、隔たったものでした。そのポイントはどこかと申しますと——時間の都合で、これ以上、詳しくよう申せませんが、確かに聖徳太子は、日本に仏教をもたらした方ということは明かですが、そのもたらした方が、梅原猛先生のお言葉を使いますと——実は、聖徳太子こそ、日本の「怨霊鎮め」の元祖であられたことをすごく強調された。それが、梅原猛の最大の学問的貢献と僕は思うのです。たいてい「怨霊鎮め」といえば、普通は菅原道真が元祖で、それを鎮めるために建てられた京都の北野天満宮は誰でも知っておりますけれども、聖徳太子を「怨霊鎮め」として祭り上げた文化事業そのものが、法隆寺にまつわるすべてのものだということを見出し、強調なされたのが梅原猛先生の大変なご慧眼だったと思います。そして、彼の言葉を使えば、「生前の聖徳太子にも増して死後の聖徳太子が、日本仏教の形を変えるのに重大な影響力をお持ちになった」といういい方をなさる訳です。この「怨霊鎮め」の感覚とは、多分、仏教が入る以前から日本民俗のこころとしてあったと思います。さらに言えば——梅原先生はあっさりこれを「神道」とおっしゃっておりますけれども——「古神道」と申してもいいような「民俗の」……つまり、はっきりいって、「仏教伝来以前の」感覚だ

ったと思います。ところが、たまたま聖徳太子は、そういう神道的「世界」の中に、法華経を中心とする大乘教典をお持ち込みなさった方……。そして古代国家の改築にまでタッチされて、繁栄させようとなさって、努力なさった方であられます。

これもまた、もし機会がございましたら、是非、小林恵子^{やすこ}さんの本を読まれるようにお勧めいたします。岡山大学の古代史学者です。文芸春秋社が非常に支援している人で、文春文庫に『聖徳太子の正体』という本がありますので、一度ご覧になって見て下さい。非常におもしろいです。ここまでは、大阪大学の古代史研究者に聞きましても、「(小林恵子^{やすこ}説は)大変、おもしろい意見ですけど、あんなにまで言われてしまうと、日本古代史がガチャガチャになりますから、あまりに恐いので、よう採用しない」というて、その世界(古代史研究者の中)では割合に知られているけども、誰も真面目には採り上げたくない説です。と申しますのは、例えば「聖徳太子は日本人でない」という意見——これは最近の古代史では定説と思うのですが——少なくとも、明治維新がでっち上げた「万世一系」の天皇家とは関係のない人だろうと思います。それはもう、定説になっておりましたけれど、この小林恵子^{やすこ}さんは、さらに「聖徳太子は西突厥人(トルコ系)だ」とおっしゃっている。西突厥とは鉄の文化を持つ騎馬民族の国で、当時、中国は煬帝^{ようだい}という偉大な大王が出てまいりまして、隋帝国という統一王朝が成立していて、その頃に、その北方の騎馬民族の中に台頭してきた大王達頭^{たつとう}という人がいたのですが——これはササン朝ペルシャ側の史料とか、東ローマ帝国側の史料にたびたび出てくる名前で、当時、世界的にも有名だった——この隋の煬帝との間でも、もちろん、北方騎馬民族内部にも葛藤がいろいろあって、この人がずっと、こっちへ移動して来て、とうとう日本に来了。そして「聖徳太子は、達頭その人だ」というのです。「これはもう、あまりの破天荒な説でございます。何が何でも、あのようなことまで言われると困ります」と、皆(古代史学者)がいうのですが、しかし、非常に説得力が豊かであります。まあ一度、お読み下さいませ。それは、「さもありません」というところが多く、大体、鉄の文化そのものもおもしろいですし、今、播磨(姫路市)の斑鳩寺に、鉄球の地球儀があるのですね。世界に二つしかないのだそうで、どこから入ってきたのか判らない。古いことは古いものです。「地球が丸い」ということを知っていた。昔、僕らが学んだ歴史では、「地球が丸い」ということが判ったのは、ガリレオの時代でしょう。しかし、ずっと以前から、ササン朝ペルシャとか、あの辺では常識であった。ですから、古代にペルシャ文化が入って来ているといわれるのですが、「このようなものを持ち込めたのは、聖徳太子一族以外には考えられない」とおっしゃっている。さらに、もっとおもしろいことは、「厩戸^{うまやど}のみこ^{のみこ}皇子」という幼名自体、聖書の「イエス生誕」の話とそっくりですけれども、それは、東ローマ帝国とかその辺との交渉があった一族と判れば、聖徳太子の話として持ち込まれて来ることも十分、考えられますね。

さらに、もっとはっきりしているのは、隋の煬帝に向けて出した詔みことのり(外交文書)です。「日、出づる処の天子、日、没する処の天子に書をいたす。向かって申して日もうさく。恙つつがなきや。云々」と。これは、自分のところは東ですから「日出づる処」、おまえさんのところは西だから「日没する処」と、少なくとも同格に扱っているわけで、世界の端っこの小さい島国日本——当時の倭国——から、そのような非常識な手紙を貰って、隋の煬帝ほどの人がまともに逢ったりするはずがない。逆にいうとこれは余程の人だったればこそ、すなわち、聖徳太子が北方騎馬民族の大王達頭であると判っていなければ、とてもあのような形で、そこから交渉が始まって、やがて遣隋使みたいな実際、ほぼ対等な外交を隋の煬帝がすることはないと論証されまして、日本書記で今まで謎といわれていたところに大変うまく食い込んで、この説を押し入れると、ストーンとほとんど確かに、謎が皆、解けてしまって、非常におもしろい。

小林恵子^{やすこ}氏の紹介

古代史研究家。1936年生。旧姓・稲田。岡山大学法文学部文学科東洋史専攻卒業。

中国や朝鮮半島の膨大な史料を駆使し東洋史の立場から日本古代史に新たな光を当て続けている。

騎馬民族征服王朝説(江上波夫)の後継者。東海大学文学部歴史学科東洋史専攻 1969年度非常勤講師。